

A 語句の意味と読み

- (1) いちばん大切なこと。肝心なこと。／「要（かなめ）」＝物事を中心。ここは「何より大切な花」
- (2) 家々に代々伝えられる秘密の技や工夫。秘伝。／外に漏らさず、後継者だけに伝えるもの
- (3) 大きな働き。大きな効果。／「用」＝はたらき。「秘する」によりて大用あるが故なり＝秘密にするからこそ大きな効果が出る、という文脈から考える
- (4) 連体詞。下に打消の語（なき）を伴って「たいした～（ではない）・これといった～（ない）」の意を表す。／★使役の助動詞ではない。下の打消とセットで見る
- (5) （観客にとって）思いがけない。意外だ。（一般には「目新しい・新鮮だ」の意）／「めったにない」より「思いがけない」でとると通る
- (6) 見る人。観客。同じ段落の「見物衆」と同じものを指す。／「～手」は人を表す。「見る手＝見る人」と考える
- (7) 演技手。能役者。今の能の「シテ（主役）」にあたる。／「為（す）る手」＝演じる人。「見手」と対になる語

B 文法

- (8) 終止形＝秘す。サ行変格活用。連体形が「秘する」となる（「秘（ひ）する花」「秘するによりて」）ことから分かる。／★サ変は「せ・し・す・する・すれ・せよ」。連体形「秘する」が決め手
- (9) ①は已然形「秘すれ」＋「ば」で順接の確定条件（～ので・～すると）。②は打消の助動詞「ず」の未然形に「ば」が付いた形と見るのが標準で、順接の仮定条件（もし～ないならば）を表す。／★なお②は「ず（連用形）＋係助詞『は』」が濁ったものと見る説もあるが、仮定条件になる点は変わらない。お使いの教科書の説明に合わせる
- (10) 「なる」＝断定の助動詞「なり」の連体形。「べから」＝助動詞「べし」の未然形。下の打消「ず」と続いて「べからず」となり、「～はずがない」（打消当然）の意を表す（「～できない」と不可能とする説もある）。／★「べからず」は打消当然（～はずがない）とする説と不可能（～できない）とする説がある。どちらでも「花にはなり得ない」という結論は変わらない。教科書の説明に合わせる

(11) 同じ。四段動詞「あらはす」の已然形「あらはせ」に付いた「ば」で、順接の確定条件（～すると）を表すから。／★仮定なら「あらはさば」と未然形になるはず。ここは「～するといつも」という恒常条件なので、「明かせば」ではなく「明かすと」と訳す

(12) 「たら」＝完了（存続）の助動詞「たり」の未然形。「ん（む）」＝助動詞「む」の連体形で、婉曲（～ような）を表す。／下に体言「見物衆」が続くので連体形。「待ち構えているような観客」

(13) 逆接の仮定条件を表す接続助詞。「たとえ～しても」の意。／上の副詞「たとひ」と呼応する

(14) 「で」＝未然形に付く接続助詞で、打消接続（～ないで）。係助詞は「こそ」、結びは「べけれ」（助動詞「べし」の已然形）で、強意を表す。／★「こそ」の結びは已然形。「知らで」＝「気づかないで」

C 指す内容

- (15) 秘めておくか、秘めずに明かしてしまうか、の分かれ目。／直前の「秘すれば／秘せずば」の対を受けている
- (16) 観客が演者（為手）を、「思いがけずおもしろい名人だ」とだけ見ているということ。工夫やしかけには気づいていない。／「上手」は「じやうず」と読み、ここは「上手だ」ではなく「芸のすぐれた人・名人」という人を指す名詞
- (17) 人の心に思ひもよらぬ感を催す手立（＝観客が思ひもよらない感動を呼び起こす工夫）。／直前の一続きがそのまま答えになる。「手立」＝方法・やり方
- (18) 敵方（＝戦う相手の敵）。／直前の「敵方用心をせぬときは」を受けている

D 口語訳

- (19) 秘めるからこそ花なのであって、秘めなければ花ではあり得ない、ということだ。
- (20) 秘事というものを明かすと、たいしたものでなくなってしまうのである。
- (21) 見る人にとって、それが花だとも気づかれないでこそ、演者の花になるのである。
- (22) わが家の秘事として人に知らせないでおくこと、それを（役者の）一生涯の主となる花とするのである。

E 内容・記述

(23) 観客が珍しい事があると予期して身構え、思いがけなさが失われるから。(三十三字) /直前の「思ひまうけたらん見物衆の前にては」が手がかり

(24) 相手が警戒していないところを突けば勝ちやすいのと同じで、工夫を秘めておくからこそ観客の意表をつき、大きな効果が生まれるということ。(六十五字)

(25) 秘事を人に知らせず秘めておいて、観客の意表をつき続けられること。(三十二字)

F 文学史・思想

(26) 『風姿花伝』／世阿弥／第七「別紙口伝」 /父・観阿弥の教えをもとにまとめた、日本最古の演劇論（能楽論）

(27) 観客を感動させる、芸の魅力・面白さ。植物の花ではない。 /★「花」を植物の意味で答えると、記述問題がすべてくずれる

(28) 室町時代／足利義満 /父は観阿弥。世阿弥は將軍義満の保護のもとで一座を率いた

【現代語訳（全文）】

「秘めておく花」というものを知ること。秘めるからこそ花なのであって、秘めなければ花ではあり得ない、ということだ。この（秘めるか秘めないかの）境目を知ることこそ、何より肝心な花なのである。そもそも、すべての物事、あらゆる芸の道において、それぞれの家に「秘事（秘伝）」というものがあるのは、秘密にすることによって大きな効果が生まれるからである。だから、秘事というものを明かすと、たいしたものでもなくなってしまう。これを「たいしたことでもない」と言う人は、まだ秘事というものの大きな効果を知らないからなのである。

ただ「珍しいものこそが花だ」と、人がみな知っているならば、「さては何か珍しいことがあるだろう」と前もって予想して待ち構えているような観客の前では、たとえ珍しいことをしても、見る人の心に「珍しい」という感動は起こりようがない。見る人にとって、それが花だとも気づかれないでこそ、演者の花になるのである。だから、見る人が、ただ思いがけずおもしろい名人だだけと思って、これが花だとも気づかない、それが演者の花なのである。そういうわけで、人の心が思いもよらない感動を呼び起こす手立て、これが花なのである。たとえば、弓矢の道（武芸）のやり方においても……

〈中略〉

敵が警戒していないときは、こちらが勝つことは、いつそうたやすいだろう。相手に油断をさせて勝ちを得るのは、珍しさという道理が大きな効果をあらわしたのではないか。そういうわけで、わが家の秘事として人に知らせないでおくこと、それを役者一生の主となる花とするのである。秘めれば花、秘めなければ花ではあり得ないのだ。